

# ファッションから見た集団規範 —「自発的制服」の成り立ち—<sup>1)</sup>

成城大学大学院文学研究科  
コミュニケーション学専攻博士課程前期1年

金子理沙

## 論文要旨

本研究は集団での服装についての研究を行ったものである。大学やコンサート会場に行った際、「同じような格好をしてしまうのはなぜか？」に疑問を抱いた。自発的制服化（「同じような格好をしてしまう現象」を意味する造語を作った）してしまう背景には、同調でだけではなく、自己カテゴリー化により、自己と他者あるいは自集団と他集団を区別したいということもあるのではないかと考えた。そこで初対面が多い会社説明会、日常的に過ごす学校、非日常的なライブ・コンサート、仲間意識を持つスポーツ観戦の4場面を用いて同じ服装にしてしまう人の性格との関連性を見ていく。そこで4つの仮説群を立てた。(1) 人から注目されたい程度と場面が似た格好をしたいという願望に及ぼす影響に関する仮説群、(2) 控えめでありたい程度と場面が無難な格好をしたいという願望に及ぼす影響に関する仮説群、(3) 目立ちたくないと思う程度と場面が安心感に及ぼす影響に関する仮説群、(4) 人の目を気にする程度と服装相談に及ぼす影響に関する仮説群である。

質問紙を用いて大学生99人（男子28名、女子70名、無回答が1名）に回答をしてもらった。質問紙は大問1と大問2から成る。大問1はファッションに関する意識調査、集団の中での自分の性格に関する調査であり、大問2はそれぞれの場面の服装に関する調査である。分析を行った結果、仮説1, 2, 3, 5群は一部支持され、仮説4群はすべて支持された。このことから仮説4に関しては目立ちたくないから同じ格好の人がいると安心することがわかった。

このことから人は性格で服装を決めるのではなく、場面に合わせて服装の選

択をすることがわかった。自発的制服化してしまう現象には、二つの側面がある。1つ目は自己カテゴリー化しているということである。スポーツ観戦でユニフォームを着るやライブTシャツを着るという行為はまさに自己カテゴリー化しているといえるだろう。自分が他のチームとの差別化をし、着ることで自分も応援しているチームの一員あることを表現できる。またライブTシャツを着用することも同様であり、一体感とチームのチーム一員あることを表現できるのであろう。このように、自ら自己カテゴリー化していくことで自発的制服が生まれるのだと考えられる。

[注]

1) この論文は卒業論文をまとめ直したものである。

## 第1章 序章

### 1 節 問題

ファッションに正解はないが、どうしても正解は何かと考えてしまうことがある。例えば、インターンシップや就職活動の説明会などで「服装自由」「スーツ以外の服装でお越しくください」と言われると困惑する場面がある。何を着ていけば正解なのか、「こんな服を着て行ったら他の人から変な目で見られるのではないか」、「自分だけ浮いてないか」と人の目がどうしても気になってしまう。会社説明会へ行く場合、友人とテーマパークに行ったりライブ・コンサートへ行ったり結婚式へ行くのとは違い、友人が必ずその説明会に参加することはないのでその時にどんな格好をして行くか相談もできない。自分はこの格好で正しかったのかと思ひながら会場へ行く。そこで周りの人と同じ格好であったときホッと、浮いた格好をしてしまったときは失敗したと感じる。そのように場違いだと感じる研究は内田ら（1999a, 1999b）でも明らかにされている。

内田ら（1999a）は36体の2種類の服装をした人形（髪型、顔、身長、体系は同じもの）の集合をランダムに配置し、場違感について被験者に評価してもらった。実験を行った。「着物」「赤黒ドレス」「紺スーツ」「ワンピース」「セーターとスカート」「セーターとジーンズ」の6種を用いて「フォーマルな服装：フォーマルな服装」、「フォーマルな服装：カジュアルな服装」、「カジュアルな服装：カジュアルな服装」の集合作り、それぞれ「1:35」から「35:

1]と徐々に2種類の人数を変え比較していく実験である。この結果、同じ服装をした人が全体の3% (1人) の時の場合から25%になると場違い感が半減し、同じ服装50%になると場違い感が1/3に減少し、75%になると場違い感がなくなるということがわかった。このことから同じ服装をしている人が増えていくと場違い感が減ることがわかる。また組み合わせられる相手側の服装の種類によって場違い感が強調されたり緩和されたりし、同じ服装をしていても場違い感が異なることも明らかにされている。

また自己評価に関して、内田ら(1999b)は謝恩会で参加者に「今日の服装はどの程度のここの『場』に雰囲気マッチしていると思いますか?」と聞き、7段階尺度で評価してもらった。この結果から人は「自分が着てきた服装はその場にあっている」という前提があり自己自分との服装があっていたと感じたとき、安心感や自己満足が生まれていると感じる。しかしその場に「あっていない」と感じると自己満足が否定され、不安感や恥ずかしさを感じ「あっていない」と誇張した評価をすることがわかった。

これらの研究より周りにあまり「浮きたくない」、「恥をかきたくない」という思いから同じような服装をしてしまい自発的制服化(「同じような格好をしてしまう現象」を意味する造語を作った)してしまっているように感じる。

そもそも制服とは何か。制服を『広辞苑』(新村1955:1331上段)で引いてみると「ある集団に属する人(学生・警察官など)が着るように定められた服装。」と書いてある。また制服について小林(1996)次のように述べている。

- ① 法的に規制されたに規制された規格に従って着用する制服(自衛官、警察官などの制服)と、②慣例に従って着用する制服(会社の職場の制服)とがある。(小林1996:24)
- ① 象徴的な機能があり、集団のシンボルとして、その集団のメンバーであることを表している。また職業、身分、地位を表している場合も多い。
- ② 制服に付随する役割を遂行する働きを有する。

例えば、警察官が制服を着ることにより、警察官としての役割を遂行することに努める。学生は制服を着ることにより、学生としての役割を認識し、その役割を遂行することに努める。また、スポーツクラブのユニフォーム着用は、競技におけるグループの団結力を高め仲間意識を強める。これらのはたらきは制服(ユニフォーム)のポジティブなはたらきであるといえる。

③ 個性をコントロールする働きを有する。

制服は集団のシンボルであり、その集団であること明示している。制服の着用者は私的なものを抑圧し自分をコントロールしがちであり、個性の自由な発達の妨げになる。このはたらきは制服のネガティブな働きである（小林 2003：31）。

服装における同調研究について岡林（2017）は、他者への内面、外面への関心がある人は非同調的被服選択し、同調的被服選択をする人は他者への関心が少ないことを明らかにした。しかし、内田（1999a, 1999b）の結果と矛盾しているように感じる。岡林はファッションへの関心度ある程度高い人々を対象に調査をしたと推測できるのであり、この場合の他者意識はファッションを通じての自己アピールによるものと推測できる。これに対し、一般人の場合は消極的な他者意識をするのではないかと考える。

また服装を同じにしてしまう背景には同調だけではなく、自己カテゴリー化があるからではないかと考える。自己カテゴリー化とは何か、ターナー（1987=1995）は次のように述べている。「自己カテゴリー化理論は社会的自己概念（social self-concept：社会的相互作用と関連し、他者との比較にもとづいた自己概念）の機能についてのいくつかの仮定と仮説から成り立っている。」（1987a=1995a: 54）、「個人の自己知覚と行動を脱個人化することである。」（1987b=1995b: 272）また、熊谷（2014）は「社会的アイデンティティを強く意識することが独特な個人の意識を失わせ、集団の規範にととらえ（集団規範への同化）自分を典型的な集団成員とみる」（2014：155）と述べている。そして、その効果について唐沢（2009）は以下のように述べている。

行為に関する理解といった認知的領域だけにはとどまらない。自己を集団成員として定義すると、集団内に共有されている規範や価値基準に即した行動が取られやすくなる。特に、共有されたステレオタイプや偏見は外集団に対する差別的態度や敵対的行動として現れ、集団間の葛藤をさらに悪化させることになる。また、個としての自己認知が後退すると、群集と一体化した行動が促進されることも明らかになっている（唐沢 2009：17）。

## 2 節 目的

大学やコンサートへ行くと同じような格好をした人やカバンや小物が全く同

じもの揃えて持っている人などを多く見られ、もはや制服化されているように見える。また同じ格好の人が大量に工場から生産させてみえることから量産型〇〇と言われ、例えば量産型女子大学生、量産型ヲタクなどとも言われている。周りの目を気にするあまり、個性を失い制服化し「自発的制服」とでも言えるような服装が生まれてしまうのではないかと、本研究では自発的制服の成り立ちについて明らかにしていく。同じ服装になっていく人の性格は、注目されたくない、控えめでありたい、目立ちたくない、人の目を気にするということだと考えた。これらは似ているが同一のことを指しているわけではない。注目・控えめ・目立ちを『広辞苑』でそれぞれ引くと「注目」は「目をそそぐこと。みつめること。また、注意を向けること。関心を寄せること」（新村 1955：1565 上段）、「控えめ」は「存分にことを行わないこと。遠慮気味にすること」（新村 1955：2001 上段）、「目立つ」は「いちじるしく人目を引く。きわだって見える。」（新村 1955：2354 上段）と書かれていた。これを踏まえて、本研究での「注目されたくない人」は「人から関心をあまり持たれたくない」、「控えめでありたい人」は「人から関心を持たれたいと思う程度が遠慮気味であること」、「目立ちたくない人」は著しく人目を引きたくないことから「記憶に残りたくない」と考える。

また自己カテゴリー化によりシチュエーションごとに服装が変わってくるのではないかと考え、4つの場面を設定する。1つ目は初対面が多く集まる会社説明会へ行く場面、2つ目は日常的で知っている人の多い場として学校へ行く場面、3つ目は趣味仲間が集まる場としてライブ・コンサートへ行く場面、4つ目は仲間意識が強くなる場としてスポーツ観戦へ行く場面である。この4つの場面を用いて性格との関係を見ていく。

## 第2章 仮説

(1) 人から注目されたい程度と場面が類似格好願望に及ぼす影響に関する仮説群

注目されたくない人はあまり関心を持たれたくないことから他者と類似した服装をしたいという理由より仮説を立てた。

仮説 1a：周りの人から注目されたくない人は注目されたい人と比べて周りの人と類似した格好をしたいと感じるだろう。

仮説 1b：周りの人から注目されたくない人は学校場面と会社説明会場面において会社説明会場面の方が周りの人と類似した格好をしたいと感じるだろう。

仮説 1c：学校場面と会社説明会場面において会社説明会場面の方が周りの人と類似した格好をしたいと感じるだろう。

(2) 控えめでありたい程度と場面が無難格好願望に及ぼす影響に関する仮説群  
遠慮気味である人は可もなく不可もない服装をしたいだろうという理由より仮説を立てる。

仮説 2a：普段から控えめでありたい人は控えめでありたくない人と比べ無難な格好をしたいと思うだろう。

仮説 2b：普段から控えめでありたい人は学校場面とライブ・コンサート場面を比べると学校場面の方が無難な格好をしたいと感じるだろう。

仮説 2c：学校場面とライブ・コンサート場面を比べると学校場面の方が無難な格好をしたいと感じるだろう。

(3) 目立ちたくない程度と場面が他者と同じ格好であることで安心感に及ぼす影響に関する仮説群

問題提起でも述べた内田ら（1999a）の人形を使った実験より全体の同種の服装が増加すると場違い感が減少することがわかった。このことから目立ちたくない人は同じ格好をしている人を見ると安心だと感じるのではないかと考え仮説を立てた。

仮説 3a：普段目立ちたくない人は目立ちたい人と比べ周りの人と同じ格好をすると安心感が湧きやすい。

仮説 3b：普段目立ちたくない人は会社説明会場面とライブ・コンサート場面を比べると会社説明会場面の方が周りと同じ格好をすると安心感が湧き

やすいだろう。

仮説 3c：会社説明会場面とライブ・コンサート場면을比べると会社説明会場面の方が周りと同じ格好をすると安心感が湧きやすいだろう。

#### (4) 人の目を気にする程度と場面が服装相談に及ぼす影響に関する仮説群

問題でも述べた内田ら（1999b）の実験結果よりその場にあった服装をしていると自己評価した場合、安心感が生まれる。しかし、場と服装があってないと自己評価したときは恥ずかしいと感じることがわかった。このことから人の目を気にする人はあらかじめ友人と相談しておくことで安心感が湧くので服装相談をすることを考える。スポーツ観戦と学校ではスポーツ観戦の方が非日常的な場面なのでより服装相談をするのではないかと考え仮説を立てた。

仮説 4a：相手の目を気にしてしまう人は、気にしない人と比べると、浮きたくないと考え友人にあらかじめその時に着ていく服装を相談するだろう。

仮説 4b：相手の目を気にしてしまう人はスポーツ観戦場面と学校場면을比べるとスポーツ観戦場面の方があらかじめその時の服装について相談するだろう。

仮説 4c：スポーツ観戦場面と学校場면을比べるとスポーツ観戦場面の方があらかじめその時の服装について相談するだろう。

## 第3章 方法

### 1 節 実験参加者と手続き

実験参加者は都内私立大学学生 99 名（男子 28 名，女子 70 名，無回答が 1 名），有効回答数は 97 名（大問 1 無回答 1 名，大問 2 質問紙作成上のミスによる無効回答）である。平均年齢は 20.03（SD=1.122）だった。質問紙を用いて実験を実施した。

## 2 節 質問紙の構成

大問は2つである。大問1はファッションに関する質問項目群，集団の中で自分の性格に関する質問項目群であり，大問2は場面想定法を用いた実験である。

大問1では実験参加者の普段の性格やファッションへの関心度について5つの質問を設け，1に「そう思わない」，2に「あまりそう思わない」，3に「まあそう思う」，4に「そう思う」の4件法を用いて調査を行った<sup>2)</sup>。

質問1では実験参加者のファッションへの興味について問う。質問2では実験参加者が普段，周り・人から注目されたいかについて問う。質問3で実験参加者が普段，周り・人から控えめでありたいかについて問う。質問4では実験参加者が普段周り・人から目立ちたくないかについて問う。質問5では実験参加者が普段周り・人の目を気にするかについて問う。

大問2では場面想定法を用いた。場面1 (①) では実験参加者が会社説明会へ行く場面を設定し，場面2 (②) では学校へ行き友達に会う場面を設定し，場面3 (③) ではライブ・コンサートへ行く場面を設定し，場面4 (④) ではスポーツ観戦する場面の計4場面を設定し実験を行った。また各場面につき5つの質問を設け，1「全くそう思わない」～5「とてもそう思う」の5件法を用いて場面を設定して実験を行った。

質問1では周りの人が同じ格好をして安心と感じるかについて問う。質問2では周りの人と同じ格好をしたいかについて問う。質問3では周りと比較して自分の格好が無難である格好をしたいかについて問う。質問4では友人とあらかじめその時に着ていく服装について相談するかについて問う。質問5では同じような服装の人を見ると仲間と感じるかについて問う。

質問紙の見本を付録をとして添付した。

[注]

2) はじめの36人は表記のミスをしてしまい「まあそう思う」…2，「あまりそう思わない」…3と表記してしまった。しかし，回答を見たところ，ことばに引き摺られず正しく理解していると思われたため，他のデータと合わせて分析した。



## 第4章 結果

### (1) 注目されたい程度と場面が類似格好願望に及ぼす影響に関する仮説群の検証

まず、注目されたい程度の「そう思わない」と「あまりそう思わない」を低とし、「まあそう思う」と「そう思う」を高とした。

各条件の類似格好願望の平均値と標準偏差は、表1に示す通りである。会社説明会場面では注目されたい程度が低い人は3.15 (SD=1.339), 高い人は3.07 (SD=1.273), 総和は3.11 (SD=1.305)となった。学校場面では注目されたい程度が低い人は2.27 (SD=1.008), 高い人は2.07 (SD=0.959), 総和は2.19 (SD=0.987)となった。ライブ・コンサート場面では注目されたい程度が低い人は2.60 (SD=1.180), 高い人は2.34 (SD=1.227), 総和は2.49 (SD=1.223)となった。スポーツ観戦場面では注目されたい程度が低い人は2.80 (SD=1.253), 高い人は3.12 (SD=1.364), 総和は2.94 (SD=1.304)となった。

表1 類似格好願望の平均値と標準偏差 (場面別・注目されたい程度の高低別)

場面	注目程度	平均値	標準偏差
会社説明会場面	低	3.15	1.339
	高	3.07	1.273
	総和	3.11	1.305
学校場面	低	2.27	1.008
	高	2.07	0.959
	総和	2.19	0.987
ライブ・コンサート場面	低	2.60	1.180
	高	2.34	1.277
	総和	2.49	1.223
スポーツ観戦場面	低	2.80	1.253
	高	3.12	1.364
	総和	2.94	1.304

注目されたいと思う程度と場面を独立変数とし、類似格好願望を従属変数とした混合計画の分散分析を行った。

この分析では表2のように場面の有意な主効果が認められた ( $F(2.407, 226.260) = 19169, p < .01, \eta^2_p = 0.169$ )。場面と注目されたいと思う程度の交互作用は有意ではなかった ( $F(2.407, 226.260) = 1.739, n.s., \eta^2_p = 0.001$ )。注目され

たいと思う程度の主効果も有意ではなかった ( $F(1, 94) = 0.082, n.s., \eta_p^2 = 0.001$ )。

表2 注目されたい程度と場面が類似格好願望に及ぼす影響に関する分散分析結果

変動因	平方和	df	平均平方	F	有意確率	$\eta_p^2$
場面	53.006	2.407	22.021	19.169	0.000	0.169
誤差 (場面)	259.932	226.260	1.149			
場面と注目の高低の交互作用	4.808	2.407	1.997	1.739	0.171	0.018
誤差	259.932	226.260	1.149			
注目高低	0.255	1	0.255	0.082	0.775	0.001
誤差	292.984	94	3.117			

場面要因について Bonferroni の多重比較を行ったところ、会社説明会場面 (平均値 3.11) と学校場面 (平均値 2.19) の間に 1% 水準で有意な差が見られた。したがって会社説明会場面の方が学校場面よりも類似格好願望を強く感じることがわかった。会社説明会場面 (平均値 3.11) とライブ・コンサート場面 (平均値 2.49) の間に 1% 水準で有意な差が見られた。したがって会社説明会場面の方がライブ・コンサート場面よりも類似格好願望が強く感じることがわかった。学校場面 (平均値 2.19) とスポーツ観戦場面 (平均値 2.94) の間に 1% 水準で有意な差が見られた。したがってスポーツ観戦場面の方が学校場面よりも類似格好願望を強く感じることがわかった。ライブ・コンサート場面 (平均値 2.49) とスポーツ観戦場面 (平均値 2.94) の間に 1% 水準で有意な差が見られた。したがってスポーツ観戦場面の方がライブ・コンサート場面よりも類似格好願望が強く感じることがわかった。

このことから仮説 1c は支持されたが、仮説 1a と仮説 1b は支持されなかった。

## (2) 控えめでありたい程度と場面が無難格好願望に及ぼす影響に関する仮説群の検証

まず、控えめでありたい程度の「そう思わない」と「あまりそう思わない」を低とし、「まあそう思う」と「そう思う」を高とした。

各条件の無難格好願望の平均値と標準偏差は、表 3 に示す通りである。会社説明会場面では控えめでありたいと思う程度が低い人は 3.14 (SD=1.263), 高い人は 3.63 (SD=1.076), 総和は 3.33 (SD=1.211) となった。学校場面では控えめでありたい程度が低い人は 2.31 (SD=1.046), 高い人は 2.60 (SD=

1.081), 総和は 2.26 (SD=1.148) となった。ライブ・コンサート場面では控えめでありたい程度が低い人は 2.45 (SD=1.094), 高い人は 2.64 (SD=1.224), 総和は 2.45 (SD=1.094) となった。スポーツ観戦場面では控えめでありたい程度が低い人は 2.64 (SD=1.244), 高い人は 3.18 (SD=0.926), 総和は 2.85 (SD=1.142) となった。

表3 無難願望の平均値と標準偏差 (場面別・控えめでありたい程度の高低別)

場面	控えめ程度	平均値	標準偏差
会社説明会場面	低	3.14	1.263
	高	3.63	1.076
	総和	3.33	1.211
学校場面	低	2.31	1.046
	高	3.05	0.985
	総和	2.60	1.081
ライブ・コンサート場面	低	2.26	1.148
	高	2.74	0.950
	総和	2.45	1.094
スポーツ観戦場面	低	2.64	1.224
	高	3.18	0.926
	総和	2.85	1.142

控えめでありたい程度と場面を独立変数とし、無難格好を従属変数とした混合計画の分散分析を行った。

この分析では表4のように場面の有意な主効果が認められた ( $F(2.532, 237.978) = 19.807, p < .01, \eta^2_p = 0.174$ )。場面と控えめでありたい程度の交互作用は有意ではなかった ( $F(2.532, 237.978) = 0.499, n.s., \eta^2_p = 0.005$ )。控えめでありたい程度の有意な主効果が認められた ( $F(1, 94) = 10.381, p < .01, \eta^2_p = 0.099$ )。

表4 控えめでありたい程度と場面が無難格好願望に及ぼす影響に関する分散分析結果

変動因	平方和	df	平均平方	F	有意確率	$\eta^2_p$
場面	40.478	2.532	15.988	19.807	0.000	0.174
誤差 (場面)	192.098	237.978	0.807			
場面と控えめの交互作用	1.019	2.532	0.403	0.499	0.652	0.005
誤差	192.098	237.978	0.807			
控えめの高低	29.327	1	29.327	10.381	0.002	0.099
誤差	265.546	94	2.825			

場面要因について Bonferroni の多重比較を行ったところ、会社説明会場面（平均値 3.33）と学校場面（平均値 2.60）の間に 1%水準で有意な差が見られた。したがって会社説明会場面の方が学校説明会場面より無難格好願望が強くなることがわかった。会社説明会場面（平均値 3.33）とライブ・コンサート場面（平均値 2.45）の間に 1%水準で有意な差が見られた。したがって会社説明会場面の方がライブ・コンサート場面よりも無難格好願望が強く感じることもわかった。会社説明会場面（平均値 3.33）とスポーツ観戦場面（平均値 2.85）の間に 5%水準で有意な差が見られた。したがって会社説明会場面の方がスポーツ観戦場面より無難格好願望が強くなることがわかった。ライブ・コンサート場面（平均値 2.45）とスポーツ観戦場面（平均値 2.85）の間に 1%水準で有意な差が見られた。したがってスポーツ観戦場面の方がライブ・コンサート場面よりも無難格好願望強く感じることもわかった。

控えめ要因について Bonferroni の多重比較を行ったところ、控えめ程度が高い人（平均値 3.15）と低い人（平均値 2.59）の間に 5%の有意な差が見られた。したがって控えめ程度が高い人ほど無難格好願望が強くなることがわかった。

このことから仮説 3a と仮説 3c は支持されたが、仮説 3b は支持されなかった。

### (3) 目立ちたくない程度と場面が他者と同じ格好であることで安心感に及ぼす影響に関する仮説群

まず、目立ちたくない程度の「そう思わない」と「あまりそう思わない」を低とし、「まあそう思う」と「そう思う」を高とした。

同じ格好をすることによる各条件の安心感の平均値と標準偏差は、表 5 に示す通りである。会社説明会場面で目立ちたくない程度が低い人は 3.11 (SD=1.371), 高い人は 3.73 (SD=1.088), 総和は 3.37 (SD=1.287) となった。学校場面では目立ちたくない程度が低い人は 2.04 (SD=0.990), 高い人は 2.79 (SD=1.138), 総和は 2.36 (SD=1.115) となった。ライブ・コンサート場面では目立ちたくない程度が低い人は 2.46 (SD=1.334), 高い人は 2.57 (SD=1.428), 総和は 2.51 (SD=1.278) となった。スポーツ観戦場面では目立ちたくない程度が低い人は 2.88 (SD=1.428), 高い人は 3.00 (SD=1.230), 総和は 2.93 (SD=1.341) となった。

表5 安心感の平均値と標準偏差（場面別・目立ちたくない程度の高低別）

場面	目立ちたくない程度	平均値	標準偏差
会社説明会場面	低	3.11	1.371
	高	3.71	1.088
	総和	3.37	1.287
学校場面	低	2.04	0.990
	高	2.79	1.138
	総和	2.36	1.115
ライブ・コンサート場面	低	2.46	1.334
	高	2.57	1.213
	総和	2.51	1.278
スポーツ観戦場面	低	2.88	1.428
	高	3.00	1.230
	総和	2.93	1.341

目立ちたくない程度と場面を独立変数とし、安心感を従属変数とした混合計画の分散分析を行った。

この分析では表6のように場面の有意な主効果が認められた ( $F(2.426, 232.863) = 23.278, p < .01, \eta_p^2 = 0.195$ )。場面と目立ちたくないと思う程度の交互作用は有意だった ( $F(2.426, 232.863) = 3.060, p < .05, \eta_p^2 = 0.031$ )。目立ちたくないと思う程度の有意な主効果が認められた ( $F(1, 96) = 4.215, p < .05, \eta_p^2 = 0.042$ )。

表6 目立ちたくない程度と場面が他者と同じ格好であることで安心感に及ぼす影響に関する分散分析結果

変動因	平方和	df	平均平方	F	有意確率	$\eta_p^2$
場面	59.669	2.426	24.599	23.278	0.000	0.195
誤差(場面)	246.076	232.863	1.057			
場面と目立ち交互作用	7.842	2.426	3.233	3.060	0.039	0.0031
誤差	246.076	232.863	1.057			
目立ちの高低	15.155	1	15.155	4.215	0.043	0.042
誤差	345.192	96	3.596			

場面要因について Bonferroni の多重比較を行ったところ、会社説明会場面（平均値 3.37）と学校場面（平均値 2.36）の間に 1%水準で有意な差が見られた。したがって会社説明会場面の方が学校説明会場面より安心感が湧くことがわかった。会社説明会場面（平均値 3.37）とライブ・コンサート場面（平均値

2.51) の間に1%水準で有意な差が見られた。したがって会社説明会場面の方がライブ・コンサート場面よりも安心感が湧くことがわかった。会社説明会場面(平均値3.37)とスポーツ観戦場面(平均値2.93)の間に1%水準で有意な差が見られた。したがって会社説明会場面の方がスポーツ観戦場面より安心感が湧くことがわかった。学校場面とスポーツ観戦場面との間に1%有意な差が見られた。したがってスポーツ観戦場面の方が学校場面よりも安心感が湧くことがわかった。ライブ・コンサート場面(平均値2.51)とスポーツ観戦場面(平均値2.93)の間に1%水準で有意な差が見られた。したがってスポーツ観戦場面の方がライブ・コンサート場面よりも安心感が湧くことがわかった。

目立ちたくない要因について Bonferroni の多重比較を行ったところ、目立ちたくないと思う程度が高い人(平均値3.02)と低い人(平均値2.62)の間に5%の有意な差が見られた。したがって目立ちたくないと思う程度が高い人ほど安心感が湧くことがわかった。

このことから仮説4a 仮説4b 仮説4c はすべて支持された。

#### (4) 人の目を気にする程度と場面が服装相談の意向及ぼす影響に関する仮説群の検証

まず、人の目を気にする程度の「そう思わない」と「あまりそう思わない」を低とし、「まあそう思う」と「そう思う」を高とした。

各条件の服装に関する相談の意向の平均値と標準偏差は、表7に示すように会社説明会場面では人の目を気にする程度が低い人は2.54 (SD=1.442), 高い人は3.23 (SD=1.431), 総和は2.98 (SD=1.465) となった。学校場面では人の目を気にする程度が低い人は1.63 (SD=0.973), 高い人は1.69 (SD=1.088), 総和は1.67 (SD=1.043) となった。ライブ・コンサート場面では目立ちたくないと思う程度が低い人2.60 (SD=1.376), 高い人は3.28 (SD=1.318), 総和は3.03 (SD=1.372) となった。スポーツ観戦場面では目立ちたくないと思う程度が低い人は2.49 (SD=1.358), 高い人は3.00 (SD=1.252), 総和は2.81 (SD=1.308) となった。

表7 服装相談の平均値と標準偏差（場面別・人の目を気にする程度の高低別）

場面	人の目を気にする程度	平均値	標準偏差
会社説明会場面	低	2.54	1.442
	高	3.23	1.431
	総和	2.98	1.465
学校場面	低	1.63	0.973
	高	1.69	1.088
	総和	1.67	1.043
ライブ・コンサート場面	低	2.60	1.376
	高	3.28	1.318
	総和	3.03	1.372
スポーツ観戦場面	低	2.49	1.358
	高	3.00	1.252
	総和	2.81	1.308

人の目を気にする程度と場面を独立変数とし、服装相談を従属変数した混合計画の分散分析を行った。

この分析では表8のように場面の有意な主効果が認められた ( $F(3, 282) = 28.960, p < .01, \eta^2_p = 0.236$ )。場面と人の目を気にする程度の交互作用は有意ではなかった ( $F(3, 282) = 0.018, n.s., \eta^2_p = 0.005$ )。人の目を気にする程度の有意な主効果が認められた ( $F(1, 94) = 6.434, p < .05, \eta^2_p = 0.064$ )。

表8 人の目を気にする程度と場面が及ぼす影響に関する分散分析結果

変動因	平方和	df	平均平方	F	有意確率	$\eta^2_p$
場面	97.526	3	32.509	28.960	0.000	0.236
誤差 (場面)	316.550	282	1.123			
場面と人の目を気にする程度の交互作用	5.776	3	1.925	1.715	0.164	0.018
誤差	316.550	282	1.122517			
人の目を気にする程度	20.916	1	20.916	6.434	0.013	0.064
誤差	305.581	94	3.251			

場面要因について Bonferroni の多重比較を行ったところ、会社説明会場面（平均値 2.98）と学校場面（平均値 1.67）の間に 1%水準で有意な差が見られた。したがって会社説明会場面の方が学校説明会場面より服装相談をすることがわかった。学校場面（平均値 1.67）とライブ・コンサート場面の間に 1%の有意な差が見られた。したがってライブ・コンサート場面の方が学校場面よりも服装相談をすることがわかった。学校場面とスポーツ観戦場面との間に 1%

の有意な差が見られた。したがってスポーツ観戦場面の方が学校場面よりも服装相談をすることがわかった。

人の目を気にする要因について Bonferroni の多重比較を行ったところ、人の目を気にする程度が高い人（平均値 2.80）と低い人（平均値 2.31）の間に 5% の有意な差が見られた。したがって人の目を気にする程度が高い人ほど服装相談をすることがわかった。

このことから仮説 4a 仮説 4c は支持されたが、仮説 4b は支持されなかった。

## 第 5 章 考察

### 1 節 仮説ごとの考察

#### (1) 仮説 1 群について

類似格好願望に関する分析では、注目されたい・されたくない人とは関係なくシチュエーションが大切であることがわかった。広辞苑より注目は「関心を寄せること」と書かれており、関心を持たれたくないからこそ周りと同じ服装を好むだろうと考えたが、違った結果となった。場面ごとに自己カテゴリー化をしているのだろうと考える。また同調が生じていると考えられる。

スポーツ観戦の場合、ユニフォームがあるので相手チームと自分が応援しているチームなのか見わけを付け、自分のチームはどこを応援しているのか周りにはっきりさせたいのだろうと考える。ライブ・コンサートにもライブ T シャツを売られているが、ライブへ行く人は基本的にそのファンの人が行くものであるので、対抗心があまりなく比較するものがないのだろうと考える。だが、複数のグループが合同でライブやコンサートを行う場合ライブ T シャツなどが買われるのではないかと考える。

#### (2) 仮説 2 群について

無難格好願望に関する分析では、場面の主効果と控えめでありたいと思う程度の主効果が有意だった。控えめでありたいと思う人はやはり遠慮気味であるからこそ服装も無難な格好をし、地味すぎず目立ちすぎずセンスも悪く見えない服装したいのだろう。また場面において無難な格好をしたいのは、例えば会社説明会は企業の目があるため素行が悪いとは思われたくないから無難な格好をしてその場になじみたいと考えているのかもしれない。



### (3) 仮説3群について

安心感に関する分析では、仮説がすべて支持された。このことから目立ちたくない人は同じ格好の人がいると安心することがわかった。特に会社説明会場で目立ちたくないと思う程度が高い人は周りの人と同じような格好をすると安心と感ずることがわかった。会社説明会へ行くことは他の3場面と比べ、初対面の人と接するので場違いな格好をして恥をかきたくないという思いが強くなるのだろう。またオフィシャルな場であり企業からの評価の評価も気になるのだろう。

### (4) 仮説4群について

服装の相談の意向に関する分析では、相手の目を気にする人は服装相談をしていた。また場面によっても服装相談の程度は異なっていた。しかし、相手の目を気にするからそれぞれの場面で服装相談をすることはないことがわかった。また最も高かったのはライブ・コンサート場面であることがわかった。場面での服装相談をする理由は、浮きたくないことではないのだろう。非日常場面であるからこそ「その時間を特別に過ごしたい」、また「思い出に残したい」などの理由で服装相談をするのではないかと考える。その例としてあげられるのはテーマパークやライブ・コンサートで見る双子コーデではないかと考える。

## 2 節 総合考察

本研究を総合的に見ると、場面の主効果はすべて有意だった。このことから人は性格で服装を決めるのではなく、場面に合わせて服装の選択をすることがわかった。自発的制服化をしてしまう現象には、二つの側面がある。

1つ目は自己カテゴリー化しているということである。スポーツ観戦でユニフォームを着るやライブTシャツを着るという行為はまさに自己カテゴリー化しているといえるだろう。自分が他のチームとの差別化をし、着ることで自分も応援しているチーム一員あることを表現できる。またライブTシャツを着用することも同様であり、一体感とチームのチーム一員あることを表現できるのである。このように、自ら自己カテゴリー化していくことで自発的制服が生まれるのだと考えられる。

そして、2つ目は、場面ごとに先入観を持っていることである。先入観を持っているため、「この場所に行くときはこの格好をしなければならない」という心

理が生まれてしまうのではないかと考えられる。例えば、就職活動の服装がいろいろだろう。就職活動をしている際に、いろいろな色のスーツや髪型があってもいいと思うが、黒いスーツを着用し同じような髪型をしているのが目立って見える。企業から見られているため、周りと同じ格好をしていれば、悪目立ちせず、浮くこともなく安心することができるのだろう。

## 第6章 まとめと今後の課題

本研究では、自発的制服を着る理由として自己カテゴリー化によりシチュエーションごとに服装が変わってくるのではないかと考え、4つの場面を用いて性格との関係を見ていった。その結果、仮説3目立ちたくないと思う程度と場面が安心感に及ぼす影響に関してのみ、場面の主効果、目立ちたくない程度の主効果、場面と目立ちたくないと思う程度の交互作用がすべて有意だった。このことから目立ちたくないから同じ格好の人がいると安心することがわかった。その他仮説1, 2, 4は部分的に支持され、場面の主効果について有意であった。このことからシチュエーションを重視し、またシチュエーションごとで類似する格好をしたい、無難な格好をしたい、服装相談をすることがわかった。

今後の課題としては、同じような服装をしてしまう人に実際にインタビューをし、「場面ごとに服装のタイプを変えているのか」など、本研究の分析では明らかにできなかった新たなことを聞いてみたい。また知らない人と同じ服になってしまうとモヤっとした気持ちになること、あるいは、友人と前もって服装について話し合っただけなのに雰囲気は似ていると複雑な気持ちになることがある。この時の気持ちと、前もって友人と相談して双子コーデをするときの気持ちの差は何なのか、今後研究してみたい。

### 文献リスト

- ・唐沢穰, 日本社会心理学会編, 2009, 『社会心理学事典』丸善出版. 17 (2020年11月26日取得, <https://elib.maruzen.co.jp/elib/html/BookDetail/Id/3000009299> Maruzen eBook Library を通じてアクセス).
- ・熊谷智博, 2014, 「第9章集団の中の個人」脇本竜太郎, 『ライブラリー基礎からまなぶ心理学=4 基礎から学ぶ社会心理学』サイエンス社.
- ・小林茂雄・鈴木淳・柳許子・永井淑子・谷田貝麻美子・平良美栄子, 1996, 『衣生活論——装いを科学する』弘学出版.

- ・小林茂雄, 2003, 『装いの心理——服飾心理学へのプロムナード』アイ・ケイコーポレーション (旧弘学出版).
- ・小林茂雄・藤田雅夫編, 2017, 『装いの心理と行動——被服心理学へのいざない』アイ・ケイコーポレーション.
- ・岡田誠士, 2017, 「大学生の同調的衣装選択行動についての調査研究」『文化学園大学・文化学園短期大学部紀要』48: 13-22.
- ・Turner, J. C. 1987a, Rediscovering the social group: A self-categorization theory. Oxford: Blackwell = 1995a. 遠藤由美訳「第3章自己カテゴリー化理論」蘭千壽・磯崎三喜年・内藤哲雄・遠藤由美『社会集団の再発見——自己カテゴリー化理論』遠藤由美訳. 誠信書房. 54-88.
- ・Turner, J. C. 1987b, Rediscovering the social group: A self-categorization theory. Oxford: Blackwell = 1995b. 内藤哲雄訳「第9章結論」蘭千壽・磯崎三喜年・内藤哲雄・遠藤由美『社会集団の再発見——自己カテゴリー化理論』誠信書房. 271-277.
- ・内田直子・小林茂雄・長倉康彦, 1999a, 「人形モデルによる集合内の服装の場違い感に関する実験的研究 (第1報) ランダム配置の場合」『繊維機械学会誌』52 (6): 80-87.
- ・内田直子・小林茂雄・長倉康彦, 1999b, 「服装の適合感に関する自己評価と他者評価の関連——謝恩会の場合について」『日本官能評価学会誌』3 (1): 31-34.
- ・新村出編, 1983, 『広辞苑』岩波書店, 3.